



③ウナギってどんな生き物？

「海の勉強室でウナギかよ！」と言わないでください。大槌湾にもウナギの住む場所があることは知る人ぞ知るところです。でも、それだけじゃないんです。今から5年前、我々はウナギの産卵場が遙か（はるか）グアム島近くの太平洋にあることを明らかにしました。水深数千メートルから数百メートルあたりまで立ち上がる西マリアナ海嶺（かぐれい）という巨大な海底山脈の周辺です。また、ウナギが月の無い新月の夜にだけ産卵することもわかりました。岩の下からとぼけた顔を覗かせているイメージの強いウナギですが、実は大槌から3000キロメートル近くも離れた熱帯の海で卵を産んでいたのです。

産卵場でふ化したウナギは、親とは似ても似つかぬレプトセファルスと呼ばれる幼生となつて、およそ半年もの間、海流に流されながら日本の沿岸へやってきます。ここでシラスウナギへと姿を変え、我々のよく知る川や沿岸域での生活を始めます。5〜15年ほどかけて十分に成長すると、ウナギは再び産卵場へ旅立ちます。驚くべきは、この時から餌を食べることをやめ、およそ半年後の産卵まで数千キロの海を泳ぎ切るだけでなく、お腹の中で卵を発達させることです。産卵を終えた親ウナギは、サケのホッチャレのように精も根も尽き果てたボロボロ

の姿になつて、熱帯の海にその生涯を閉じるのです。月の無い真つ暗闇の夜、どこまでも深く青い太平洋の真ん中、巨大な海底山脈を背景に生涯たった一度だけ産卵するなんて、小説家でも思いつかないロマンチックな生き様ではないでしょうか。



ウナギの幼生「レプトセファルス」

生態に多くの謎残る

さて、ここまで偉そうに書いてきましたが、ウナギの生態にはまだまだ多くの謎が残されています。例えば、産卵場の方角を正確に知り、数千キロの海を泳ぎ渡り、さらには巨大な海底山脈で、新月の夜という「約束の時間」にぴったりパートナーを見つける方法など。我が身に照らせば、最新のGPSだの船だのを頼りに何とか近くまで辿り着けたところで、最後は携帯電話片手にオロオロする姿しか浮かびません。これまで一度たりとも産卵場へ向かう親ウナギが採集されたことはなく、この謎を解く手がかりは極めて限られています。ウナギの能力と自然の不思議さには、ただただ圧倒されるばかりです。そんな訳で答えられるかどうかわかりませんが、どうなっているんだらうと思われようかなことがありましたら、ぜひ質問コーナーまでお寄せください。全力で対応させていただきます。

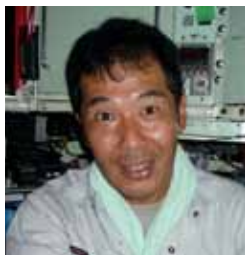
太平洋生まれの天然物

そんなウナギが、今、絶滅の危機に瀕（ひん）しています。環境省はライチョウやアマミノクロウサギ、国際機関はジャイアントパンダやマウンテンゴリラと同じレベルの危機と判断しています。ウナギといえは養殖が思い浮かびますが、実は卵から育てる技術が存在しないため、天然のシラスウナギを捕まえて、養殖池で大きくしているに過ぎません。つまり、私たちが食べているウナギはすべて、真正正銘の「太平洋で生まれた天然物」なのです。

昭和三十年代あたりまで、松島湾を中心とする地域は、我が国有数のウナギの漁場でした。また、初めて駅弁にウナギを供したのは、明治四十年東北本線の小牛田駅（こぶた）です。その一方で、宮城、岩手周辺には古くからウナギと関連の深い雲南神（うんなんじん）の信仰が存在します。今、絶滅に瀕したウナギを救うためには、単なる「食べ物」としてばかりでなく、こうした多様な視点から向き合うことが重要だと思えます。

東京大学大気海洋研究所・国際沿岸海洋研究センター教授

青山 潤



青山 潤（あおやま・じゅん）1967年神奈川県生まれ。専門は魚類の生態学。研究の傍らエッセーも執筆。「アフリカによる旅」（講談社）で第23回講談社エッセイ賞受賞。他に「うなドン」により旅・ザ・ファイナル（いづれも講談社）などがある。

「質問コーナー」

皆さんからの質問をお待ちしています。住所、氏名、連絡先（電話番号など）を明記し〒028-1102 大槌町赤浜2-106-1 東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターへ。ファクス0193-42-5612でも受け付けます。選ばれば、次回以降のこのコーナーで質問にお答えします。